



完成した本学への新道と駐車場

## 本学創立 10 年の歩みと展望

帝京科学大学 学長 小林 靖雄 (e-mail: yasuo@ntu.ac.jp)

帝京科学大学は平成2年4月に「西東京科学大学」として創設され、平成8年に現在の名称になりましたが、本年3月で創立10周年を迎えます。その建学の精神は「幅広い教養と人間性豊かな、創造的能力をもった実践力ある専門技術者の養成」であります。

今日わが国では、少子化が進むなかで高等教育への進学率が著しく高まり、いわゆる「大学の大量化時代」を迎えて、大学は多様なニーズをもった学生の要求を満足させるような教育を行うことを求められています。今日までの本学10年の歩みはこのような要求に応えるための苦労の連続であったと思われる。地域への大学の開放も強く望まれていることのひとつです。

本学の学部を構成する学科は、メディアサイエンス、バイオサイエンス、環境マテリアル、マネジメントシステムという先端科学技術の4学科ですが、その内容はまさに日進月歩の勢いで進歩・発展しています。大学の教育は、この進歩を先取りするような深い研究に基礎づけられながら、その成果を実際の教育の現場で学生に効果的に伝達して行くものでなければなりません。新入生のためのフレッシュ・セミナーにはじまり卒業研究に配属されるまでつづけられる助言教員制度、できる限り少人数のクラスで行われる密度の濃い授業、重点的内容に絞った実験・実習などは、すべてこのための努力であります。

本学は、目下のところ、この4学科にさらに新しい学科を加えることは考えておりません。それは、それぞれの学科がその教育・研究の内容を他学科との関連で複合的に充実・発展させ、新しい要求を取り込んで実質的に複数の学科の教育内容を学修できるような体制をとりつつあるからであります。本学ではこれを『複合履修プログラム』と呼び、例えば「環境エレクトロニクス」、「環境マネジメント」、「インターネットビジネス」などの学修コースが新学期とともにスタートします。本学にはそれを可能にする実力のある教員が多くいるという強みがあります。

昨年開始された「大学院バイオテクノロジー研究センター」創設の事業は、このような教育・研究の発展を可能にする将来に向けた重要な事業であり、今後は他の分野にも同様の研究センターが建設されるものと思っております。かくして、本学は、規模は小さいが、基礎を充実し、幅広い科学技術の教育研究を担当する足腰の強い理工系大学として、21世紀に向かって飛躍的な展開を期待される大学であることを信じ、学長としての挨拶といたします。

発行人：帝京科学大学(TUST)  
学長 小林 靖雄  
〒409-0193  
山梨県北都留郡上野原町  
八ツ沢 2525  
TEL：0554-63-4411  
FAX：0554-63-4430（本館）  
4431（実験研究棟）  
帝京科学大学ホームページ  
<http://www.ntu.ac.jp/>

# 帝京科学大学 大学院バイオテクノロジー 研究センターの構想と運営について

研究センター長 大学院バイオサイエンス専攻 教授 安楽泰宏 (e-mail: anraku@ntu.ac.jp)

昨年4月に文部省の「私立大学学術研究高度化推進事業:ハイテクリサーチセンター整備事業費」による帝京科学大学大学院バイオテクノロジー研究センターの設置が認可されました。

この研究センターは、21世紀の本学の未来を切り開こうとされる沖永理事長、小林学長をはじめ関係教職員のみならずの熱意と強力なご支援から生まれてきたものであります。研究センターは本年4月19日に竣工披露と開所式典が行われる予定です。今後、関係者一同、センターの目的達成のために一丸となって研究に邁進してまいります。ここにセンターの構想と運営について概要を説明します。

**研究センターの構想:** 本学のバイオサイエンス学科と大学院バイオサイエンス専攻は、創立以来、山梨県内唯一のバイオ系理工学部とその大学院として幅広いバイオサイエンスのフロンティアにおいて活発な研究と教育活動を展開し、数多くの成果を挙げてきました。

この間、教員の自主性と個性を尊重しながら、「遺伝子」を共通のキーワードとして教員間の研究交流を活性化し、基礎研究から応用技術の創成へ向けての挑戦をつづけてきました。この研究センターを構想するにあたり、バイオサイエンス学科とバイオサイエンス専攻の教員は、この実績を評価・尊重するとともに、本学の立地条件を勘案して次の基本方針を取り決めました。

基礎・応用研究を包括するバイオテクノロジーの創成研究を推進し、西東京・山梨地区のバイオ研究の拠点となる「センター」を設立する

教員の研究成果を集積し、重層しつつバイオサイエンスのフロンティアを拡大する「プロジェクト研究」を展開する

21世紀が「バイオ新産業」創出の時代であることを認識し、産官学にまたがる研究交流・情報公開の「場」を提供する

これらの基本構想が文部省によって認可され、平成11～14年度の4年間にわたって実施されるに至ったことは、関係者一同にとって誠に喜ばしいことでもあります。

**研究センターの運営:** 上記の目的を達成するため研究センターは次の3プロジェクトについての研究を5つの研究グループで行います。

生物機能解析プローブ開発研究

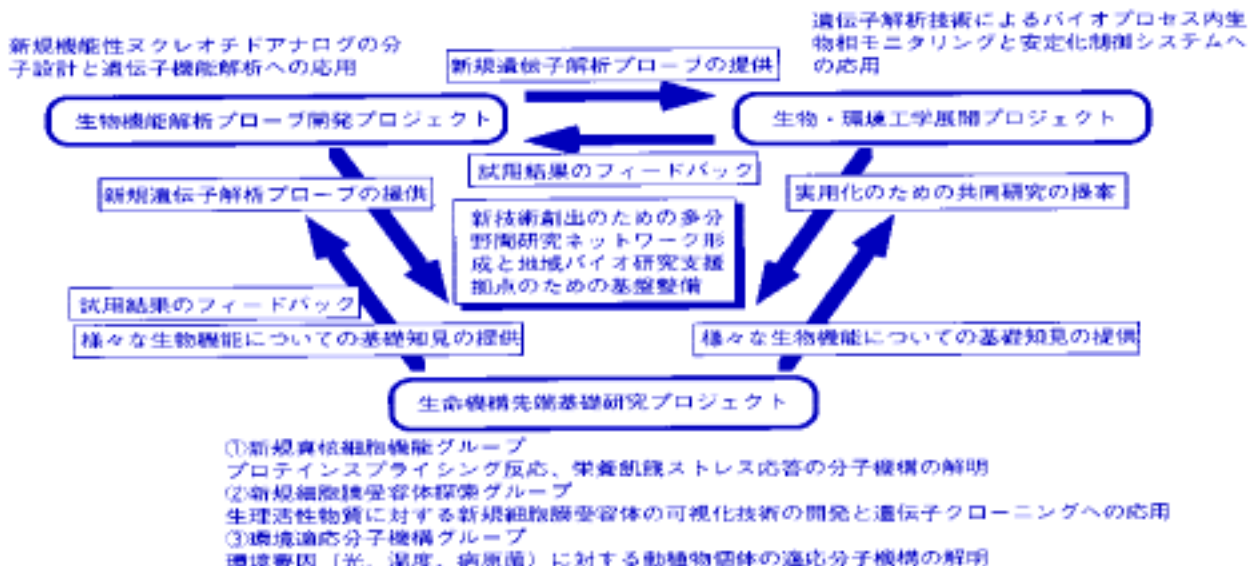
生物環境工学展開研究

生命機構先端基礎研究: 1] 新規真核細胞機能、2] 新規細胞膜受容体探索、3] 環境適応分子機構

各研究プロジェクトの内容と相互の関連については参考図をご覧ください。

研究にあたって研究センターに「ハイテクリサーチセンター研究設備整備費」によって購入される9研究機器・システムを適正に配備するとともに、「研究支援スタッフ費」により博士研究員を雇用し、研究の効率化を図ります。また、運営全体を統轄するために「帝京科学大学大学院バイオテクノロジー研究センター規則」と「同管理委員会規則」が制定され、プロジェクト研究の運営と予算・人事の管理に対する万全の体制が整えられています。

## 帝京科学大学大学院バイオテクノロジー研究センター



# メディアサイエンス学科

**新しく入学される諸君への期待** メディアサイエンス学科 教授 松澤 剛雄 (e-mail: m-takeo@ntu.ac.jp)

このニューズレターは第 3 号から、一般入学試験の合格者にも配布されることになっていますので、私は教育について日頃感じていることを述べ、新しく入学される学生諸君の奮起を大いに期待したいと思います。

新入生を迎え私どもが直面することは、さまざまな資質の学生諸君が入学し、大学が期待する資質とのギャップが大きいことです。理由は他に譲るとして、基礎学力と学習意欲が低いこと、進学目的が曖昧なまま入学してくる学生が多いことです。

このため、教員と学生諸君の歯車がかみ合わないまま、一部の学生は貴重な4年間の大学生活を漫然と無気力に過ごしてしまうという残念なことになっています。

これらの課題を克服するためには学生諸君とわれわれ教員の大いなる努力が必要です。

まず学生諸君には夢を持って欲しいことです。「こうなるといいな」、「こうするぞ」といった意志がはっきりしていなければ何もはじまりません。次に、その夢を実現するために、プロセスを踏んで、それに沿ってより一層の努力が必要です。ゴルフの世界的プレーヤーのタイガーウッズや野球の松坂投手も少年時代からプロになることを夢に、日々血の出るような努力を重ねて、いまプロになっているのです。

学生諸君が夢を持ち、その夢の実現を支援するために、本学にはフレッシュセミナーや助言教員制度が設けられ、諸君の将来のこと、単位修得のことなどどんなことでも個人的に相談に乗っています。また、従来の多人数の一方的な教育から少人数制を採用し、学生諸君が興味を持ち、諸君からもアプローチできる双方向教育をいろいろと工夫して、実行しています。しかし、残念なことは学生諸君からのアプローチが非常に少ないことです。学生諸君には受け身の姿勢を正し、自分の夢を持ち、積極的に大学や教員を利用して自分の夢を実現して欲しいものです。

新しく入学される学生諸君に大いに期待するとともに、諸君の夢を実現するための支援を惜しみません。

## ネットワーク元年

メディアサイエンス学科 教授 永沼 充 (e-mail: naganuma@ntu.ac.jp)

今年は本学にとってネットワーク元年となります。学内 LAN が昨年整備され、本格的に運用を開始しました。今年4月からは電子・情報科学科がメディアサイエンス学科と改められ、コンピューターネットワーク実習など新しい科目が導入されます。

私は昨年4月に本学に赴任した新米教員ですので研究室はまだ立ち上がってはいませんが、卒業研究の学生諸君とは電子メールにより大まかな議論とスケジュール調整をした後、教授室で具体的な議論をすることにしています。それまでは NTT の研究所で光通信デバイスの研究をしていましたが、本学ではアプリケーション側に1ピットシフトして、ネットワークも担当します。

企業ではお客様が神様です。大学は中立的な立場で学会・産業界へ貢献するというミッションはありますが、授業料を負担している学生諸君が customer であることに変わりはありません。授業料を納めた側が試験で採点されるという当たり前のシステムは新米教員には不思議に思いましたが、結果としての satisfaction を学生諸君に与えるという契約が前提にあることがわかります。時には、「しっかり目を開けて授業料の元ぐらいいは取れ！」と言いたくなることもあります。

これからは大学にも satisfaction を指標とした運営が求められます。本学科がメディアサイエンス学科へと脱皮して行くのもこの趣旨に沿ったものと思います。

ところで、ネットワークは何も光ファイバーや無線アンテナでつながっている「網」ばかりではありません。ヒューマンネットワークのような無形のネットワークも大切にしたいものです。もっともネットワークには「しがらみ」という意味もあります。要は「自分の軸をきちんと持って」ということでしょうか。

## 21世紀を迎えるにあたって

メディアサイエンス学科 助教授 木村 龍平 (e-mail: kimura@ntu.ac.jp)

学科内でも若手の私ですが、本学が創立されてから早くも10年と聞くと感慨深いものがあります。創立当初はまだ実験をするにも実験研究棟がありませんでしたので、どのように充実した講義を行うかに、よい意味で全ての時間を投入していました。やがて第1期の卒研が配属され、本格的な研究がはじまりましたが、何をやるにもないないづくしで、あるのはやる気とマンパワーだけという状態がつつきました。

そして現在、21世紀を間近に控えて、研究設備は充実し、パソコンやネットワークは最新のものが整備され、何不自由なく最新の研究が出来るようになりました。今後はいかに学生のやる気と興味を喚起し、自分で考え、創意工夫することの喜びを与えるかが最大のテーマであると考えています。右の写真は平成5年当時の第1期卒研の実験風景です。実験装置もまばらでガラんとした実験室ですが、毎日あれやこれやディスカッションを繰り返し、熱気だけはいっぱい詰まっていたことを思い出しています。





# バイオサイエンス学科

## 私の研究

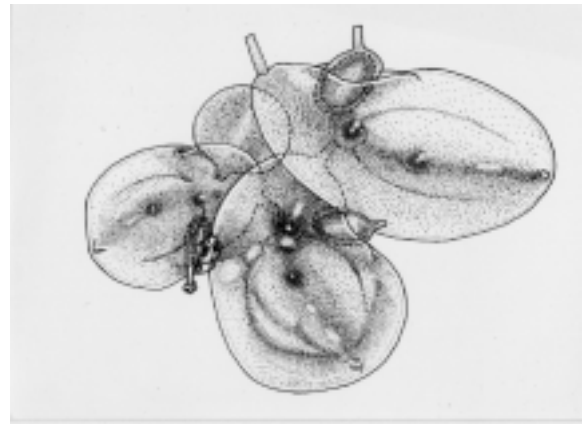
バイオサイエンス学科 教授 別府 敏夫(e-mail: beppu@ntu.ac.jp)

私は水田に浮いている小型の植物(約 3~5mm)であるアオウキクサを研究材料にしています。アオウキクサは花を咲かせる植物としては世界最小の種類のひとつですので、狭い研究室で実験するには好都合な植物です。

多くの植物は夜の長さをはかり、その植物が花を咲かせるべき季節に花を分化しはじめます。この現象は光周性といい、1920年代に発見されていたのですが、つい最近まで細胞内でのような生化学反応が進行して花の分化に至るのか、全く未解明といっても過言ではない状態でした。

私は以前には別の研究をしていましたが、本学に赴任してから花の分化のメカニズムを研究しはじめました。動物や微生物などにおいて、環境刺激(光、浸透圧、味覚など)を受けた細胞はその情報をカルシウム濃度の上昇という現象を通して細胞内に伝えることがよく知られていましたので、花の分化へのカルシウムの関与について調べてみました。すると、やはり花が分化する時にはカルシウム濃度の上昇が必要なが分かりました。また、カルシウム濃度の上昇に刺激され細胞内でいくつかのタンパク質が活性化され、最後に花をつくる遺伝子が活性化されるらしいことも明らかになってきました。

今後、これらのタンパク質の遺伝子を取り出し、植物に導入し、実際に花の分化に重要な働きをしていることを証明したいと考えています。



アオウキクサのスケッチ

## 私の趣味 - 香港旅行 -

バイオサイエンス学科 助教授 松岡 浩 (e-mail: matsuoaka@ntu.ac.jp)

筆者の趣味は香港旅行です。香港に直接行くこともありますが、ヨーロッパへの行き帰りなどに立ち寄る場合もあり、かれこれ 10 数回は香港に立ち寄っています。その度に、数日かけて香港中を歩き回っています。

香港というと、「買い物天国」というイメージがあるかも知れませんが、確かに、かつてはブランド服飾品の価格は日本よりも明らかに安かったのですが、現在では決して安くはなく、ものによっては日本で買うよりも高いくらいです。また、ホテル代も徐々に高くなってきているように感じます。また、手近な海外旅行ならば、ウォン安でもあることだし韓国でもよさそうですが、それではなぜ香港に行くのか。

ずばり、香港の奥深さとその活力に魅力を感じるからです。香港は雑然としており、通りは、まあ、一言でいえば汚い。目抜き通りのネイザン道ですら、上半身裸の男たちが荷物を担いで歩いています。

市場に行けば、血の滴る生肉がそのままぶら下げられ、あひる、鶏から亀、蛇、蛙まで生きたままで売られています。一方で、高級ホテル、高級ブティックに入れば外の喧噪とは全く無縁の別天地です。品物の多さ、それも日本ではみかけない品物があるのも香港です。鹿の角、田七人参など漢方薬の数々、がらくたか骨董品か判別不能な物品の数々。屋台では時計、ハンドバッグなどあらゆる種類のまがい物を売っています。そして一方で、最新のコンピューターとその関連グッズも手に入る。

香港とは、これらが渾然一体となっている社会、まさに中国 4000 年の歴史をそのまま凝縮している社会とも言えます。経済優先で、社会による保護のほとんどない香港では、生きるためにとにかく一所懸命に働くしかない、あらゆる人々が、必要に迫られてのこととはいえ活力を持って働いている社会、それが香港なのです。筆者はこの活力ある街並を見るのが好きなのです。

香港は 1997 年にイギリスから中国に返還されました。それにあわせて、新しい飛行場もでき、さらにはディズニーランドを誘致することも決まっています。香港は、中国の一部でありながら、1国2制度のもとでの自由主義圏でもあります。香港人は、中国への返還以降、しだいに自由がなくなっていると言います。筆者としては、今のままの自由な香港が長く続いてくれることを祈っています。



香港中心部の摩天楼群

マンダリンホテルより中環の皇后像広場方面の眺め。香港は超高層ビル、超高層マンションが多く、人口は超過密であり、これが競争社会を生み出す要因のひとつでもあります。香港については香港観光協会 (<http://www.hkta.org/japan/>) のホームページに詳しい。

## 環境マテリアル学科

### 3 度目の研究室づくり

環境マテリアル学科 教授 瓜生 敏之(e-mail: uryu@ntu.ac.jp)

第2のミレニアムの最後の年となった1999年4月に、学生時代から数えて42年を過ごした東京大学を停年で退官し、帝京科学大学環境マテリアル学科の教授として勤務することになりました。私は高分子化学分野で研究と教育に携わってきましたが、化学の分野で最高といわれている日本化学会賞を受賞したことが私の仕事を理解していただくのに役立つのではないかと期待しています。

1970年に2年間のアメリカ留学を終えて帰国した時、私は、重クロム酸カリウム混液という重金属クロムを含む液体をガラス器具の洗浄剤として使うのをやめて、アメリカで使われていた有機系の洗浄剤への切り替えを全国へ広めていきました。紙パルプ工場の悪臭の解決や別の産業の工場から排出されたPCB(ポリ塩化ビフェニル)の問題に関与したことも私の仕事のひとつです。私は、立体規則性多糖の合成、抗エイズウイルス活性の硫酸化多糖の合成、液晶ポリマーの合成、ハイパーフォーメーションコンクリートの研究開発指導、電子線重合技術の研究開発指導などいろいろな研究に携わりましたが、最後の2つは工業化されています。

帝京科学大学に決めるに当たって他の大学より長く研究できるというのが魅力でした。大学は、学生はもちろん教員も知的刺激を求めに来るところなので、この大学のようにキャンパスが田舎にある場合、どのように学術的刺激を引き起こせばよいのか考えています。本学へ来て一番面白いと思ったのは、昼食時の教員食堂での会話です。国内・海外の大学のファカルティメンバー専用の食堂にはよい雰囲気がありますが、帝京科学大学は雰囲気がよくて楽しいところです。もうひとつよいなと思っていることは、学生がよく挨拶をしてくれることです。若い頃アメリカの大学に留学していた時に「ハイ」とよく挨拶し合ったことが思い出され、気持ちが和みます。

私は、今、3度目の実験室の立ち上げに忙殺されています。1回目は1970年に留学から帰ってきた助手の時代で、2回目は東京大学工学部助教授から同生産技術研究所教授になって本郷から六本木キャンパスへ引越しし、実験室を作り上げた時です。3回目の帝京科学大学では、何も無い実験室に、実験台からドラフトチャンパーまで何から何まで新設しました。4月から暫くの間は博士研究員を2人と東大の博士課程の大学院生を1人連れてきて、研究室の立ち上げを手伝ってもらいました。4月に着任したとき、卒論の学生を募集したら、すぐ10人の定員が満員になり、何とかなったのですが、そうっていないのが実情です。

それは先に書いた、上野原という交通不便な田舎にある無刺激の大学へ通学してくるという一種の安心感が学生に及んでいて、他大学の学生のように研究室へ来ないのです。化学実験は毎日やりつづける中から予想外の面白い結果が生まれて来るもので、私は学生諸君と一緒に真剣に研究したいと思っています。

このような毎日の中、12月中旬にマテリアル関連のハイテクリサーチセンターの設立構想が話題になりました。私は、今、文部省科研費の特定領域研究「スーパー糖鎖分子」の研究代表を務めています。この経験をもとに教職員のみなさんと協力してセンター構想を造り上げました。「未来材料研究センター」という夢を追って学生や教職員のみなさんと未来へ向けて羽ばたきたいと願っています。

### ドイツのマックスプランク研究所に滞在して

環境マテリアル学科 助教授 落合 鍾一(e-mail: ochiai@ntu.ac.jp)

私は現在ドイツのシュトゥットガルトにあるマックスプランク研究所の粉末冶金研究所(PML)にゲストサイエンティストとして滞在しています。その周りには森と牧草地と大きな池があって鴨などの野鳥が観察でき、秋には森の散策道は紅葉した落ち葉で黄金色になります。

PMLではF. Aldinger所長の下でグループ毎に異なった研究テーマが走っています。グループリーダーは博士号を取得した研究員で、Ph.D.候補学生を中心に外国人留学生など10人近い研究員を指揮しています。また、各グループには2~3人のテクニシャンが所属し、装置の取り扱いなど実験上の指導を行なっています。研究者の数は流動的で、プロジェクトの予算に応じて増減していますが、これは欧米では学生の生活費が予算からまかなわれているためです。

私はDr.G.Thurnのグループで強誘電セラミックス系アクチュエーターの研究に参加しています。研究試料作成には無塵状態が必要なため、宇宙服のようなユニフォームを着てクリーンルームで作業しています。徹底した研究環境はさすがにドイツを感じさせます。また、学生が自分のテーマを充分理解して、自主的に実験計画を立てて研究し、教授と対等に議論している姿を見ると、研究者の質が高いことがわかります。

話を転じてドイツでの生活を紹介します。ドイツ人は朝型で、朝5時半に開ける店もあるほどです。研究所の職員は7時半頃には来て午後4時くらいまで仕事をして、5時前後には帰宅します。このパターンは前日にパーティーがあって夜ふかししても変わりません。夕食を軽く済ませて、映画やオペラ、コンサート、ショーなどをごく日常的に楽しんでいます。ビールの種類が多いことはよく知られていますが、値段も格安です。グリューワインと呼ばれるお爛したワインがあるのも楽しいことのひとつです。海外旅行ではなく、学生として欧米に長期滞在するチャレンジ精神をあなた方若い人たちに期待したいと思います。



# マネジメントシステム学科

## 21世紀は数学応用の時代に

マネジメントシステム学科 教授 三浦 大亮 (e-mail:miura@ntu.ac.jp)

一昨秋、「ブラック・ショールズ微分方程式」という本がベストセラーの上位にランクされ続けているとテレビや新聞で話題になりました。この本はいわゆる金融派生商品の価格決定の公式(偏微分方程式)を扱い、確率・統計や微分・積分の入門から説き起こしています。今流行りの「金融工学」の入門書で、銀行や証券会社の社員や一般の会社のスタッフが読者と想定されています。

読者の多くは、できることなら数学とは無縁でいたいと願っていた人たちではないかと私は想像しています。入門から読んでいるとはいえ、学校でしっかり数学の勉強をしなかった人にはやはり理解困難なテーマです。数学は、以前から実務の広い分野で不可欠の知識として活かされているのですが、数学の応用、とくに確率・統計というと多くの人が敬遠してきた教科だといってよいでしょう。

数学に改めて脚光を浴びせたのがこの金融工学です。一般には文科系の人達の担当と思われていた領域において、数学が主役を演じるようになったというのが今後のことを考える上で重要なポイントです。

私は昨年春に産業界から大学に転じてきました。この学科は、確率・統計を基礎からていねいに教育した上で、確率論の応用、オペレーションズリサーチ(経営管理の数理的手法)、システム工学(仕事遂行の科学的アプローチ)など数学の応用を主要な研究・教育分野のひとつにしていることに魅力を感じ、その分野で教育にあたっています。

そうです、21世紀は経営管理にいかにも数学を活用するかが経営の成果を左右する時代になると考えられます。金融工学をひとつの科目として開講し、21世紀に活躍する人材を育成することができるようになればと思っています。

## 私のマーケティング案内

マネジメントシステム学科 助教授 佐々木 慎一(e-mail:sasaki@ntu.ac.jp)

私の大学での役割はマーケティングを中心に講義と卒業研究指導を行うことです。

私は家電メーカーで長い間市場調査・新製品開発とそのマーケティングを仕事としてきました。この仕事を通して、私は、広い分野の事実を素直に見て、自分で組み上げ、次に何が起こるかを考えようと心がけてきました。とくに苦労したのは、個人と家族と会社がすべてひとつの世界に結びついているということです。

変化は何時どこからでも起こってきますから、常にウォッチングしていなければならないし、分析も当然行わなければなりません。グローバル化、情報化によってマーケティングは大きく変わりました。事実を見る範囲が飛躍的に広がったということです。実社会で得てきた知識と経験をいかに整理し、わかりやすく講義し、研究室での学生指導を行うか、それが課題です。

私は、マーケティングを「顧客の満足を創り、企業の利益を得る」と定義しています。学生諸君は現状では前半の立場、つまり「顧客」の立場に立っています。しかし、やがて社会に出て、「企業の利益を得る」という立場に立ちます。この2つの立場を学生の立場で具体例をもって結びつけていくことが大きなポイントだと思っています。

実際には学生に教えられることもあります。異なった目線から時代の先を見るセンスのよい学生に身近な現実の中で起きている事実を分析させて、それを組み上げていく能力を育てることが私のマーケティング教育の原点だと思っています。

## いちばん若い学科スタッフとして

マネジメントシステム学科 助手 新行内 康慈(e-mail:shin@ntu.ac.jp)

私は平成8年4月から3年間、助手に在籍したまま帝京科学大学大学院博士課程先端科学技術専攻1期生として宮津教授のもとで学び、臨床検査値とそれに基づく診断における諸問題について、統計手法を用いた学位論文を取りまとめる機会を得ました。慣れない国際学会での発表・ディスカッションなど様々な困難に出遭いましたが、平成11年3月に課程を修了し、学位を頂くことができました。この研究課題にはまだ多くの問題があるので、平成11年4月から参加しているISOのJIS化委員会の情報なども活用して研究を続けています。私が研究に用いた「統計手法」は、収集したデータからさまざまな情報を読み取ったり、推測したり、仮説を検証したりするための技術です。この技術は、時代の変化・必要性に応じて様々な分野に適用できる大切な基礎技術といえます。

私は、平成9年度から数学・物理学演習の一部を、平成11年度からの数学演習の一部を担当しましたが、平成12年度から基礎数学演習とMS基礎数学および経営数学の一部を担当します。この講義では、統計手法を単に知識として「暗記」するのではなく、その重要性を理解した上で道具として使いこなしてもらえよう授業作りを目指して努力しています。

統計手法を学ぶ授業は、数学の苦手な人にも理解してもらえよう高校の内容を基礎から徹底的に復習することからはじまります。また、生産管理・品質管理・人間工学の各分野の実験でデータの収集・解析・考察を実際に行うを通して、統計手法についての理解を深めてもらえよう努めています。

卒業研究を含めた専門科目を学ぶための基礎作りをサポートすること、研究成果を授業にフィードバックして興味を持ってもらえよう授業作りを努めることが学生の皆さんと年齢的に一番近くにいる私の役割だと考えています。





## 第9回科大祭を終えて

大学祭実行委員会副委員長 大久保 英一 (e-mail: festival@ntu.ac.jp)

秋晴れに恵まれた11月6日と7日の両日、「第9回科大祭」が開催されました。今年度はキャンパス整備の一環として整地された多目的広場に屋外特設ステージを設け、その周辺をメイン会場として、本館棟・大学院棟・実験研究棟全体を会場として様々なイベントを行いました。

今年は参加したサークルと団体の数が昨年よりも増加し、綿菓子・焼き鳥・水餃子・焼きおにぎり・みつ豆など多種・多彩な模擬店がステージ周辺に店開きして賑やかな科大祭となりました。

実行委員会主催のイベントも盛大に開催しました。中でも2日目の最終イベントとなった「ピンゴ大会」では、デジタル・ビデオ・ディスクプレーヤーやスキー場ペアリフト券などの豪華賞品が登場し、実施回数を増やして大いに盛り上がりました。「大学1周うるとらクイズ」、「第2回白衣の似合う人コンテスト」、「カラオケ大会」、「Dance Dance Revolution 大会」など、学生だけでなく、地元の方々や小中学生も楽しめるようなイベントも開催しました。「Dance Dance Revolution 大会」は今はやりの体感ゲームということもあって、参加されたみなさんそれぞれに様々なパフォーマンスで踊り、見る人・踊る人みんな楽しんでできました。アマチュアの声優として活躍されている方にイベントの司会をお願いしたこともお祭りらしさを大きくしたと思っています。

また、今年とくにお招きした「明和電機」によるトークショーは、ご自身で制作されている様々なオリジナル楽器の実演演奏やビデオ・スライドを取り入れたマルチメディアなトークショーとなり、ファンの方だけでなく参加された多くの方々に楽しんで頂くことができました。



公開講座の様子



ステージ周辺の光景

白衣の似合う人コンテスト優勝者



模擬店の様子



大学ならではの学術系イベントとして、4学科15人の先生方のご協力を得て「研究室公開」をはじめ「インターネット体験講座」やバイオサイエンス系の「公開実験」その他「公開講座」も開催されました。

恒例の「バザー」も、今年は、パーソナルコンピューターやFM ラジオのほか、本や雑貨品などが出品されていました。同時に開催された「即売会」では、焼きたてのフランスパンの安売りが1人暮らしの学生の人気を集め、売れ行きは上々でほとんどの品物が売り切れるといった盛況ぶりでした。

参加団体の数が増えたことで昨年よりも学生の参加者も増え、大学祭が学内に根を下ろしてきたと思っています。

私は昨年から大学祭に関わってきましたが、実行委員のがんばりが実りつつあり、今年の大学祭は昨年より盛大で、まず成功だったように思えます。しかしながら、昨年よりも参加者が増えたとは言っても、まだまだ学生の参加が少ないのが現状です。お祭りやイベントが好きな学生がもっと参加してくれたらよいというのが本音です。実行委員として参加するのもひとつの手だと思いますし、またサークルや有志で団体として参加するのもよいと思います。とにかく大学祭期間を「休み」として過ごすよりも、主催者としてであれ、参加者としてであれ、科大祭がもっともっと多くの人々の参加によって盛り上がるようになればよいと思っています。この Newsletter をお読み下さったみなさんが次の大学祭を「大学生活の思い出の1ページ」となるように過ごしていただくことを願っています。

## 図書館 - 知識の宝庫 -

図書館長 大津賀 望 (e-mail: otsuka@ntu.ac.jp)

平成 2 年 4 月に開設された図書館は本館棟横にあります。総床面積 2,856 m<sup>2</sup>、3 階建ての建物です。蔵書数は理工系の図書を中心に約 7 万冊、学術雑誌は約 600 種類あります。AV 機器やコンピューターの導入により、高度情報化時代に対応した研究・学習の拠点として重要な役割を果たしています。

- ◆ **蔵書の配架** : 理工系の図書を中心として、1 階に人文社会系図書・学術雑誌・新聞が、2 階に自然科学系図書・一般雑誌が、3 階に製本雑誌・文庫・新聞縮刷版がそれぞれ配架され、資料は自由に手にとって見ることができます。
- ◆ **蔵書検索システム(OPAC:Online Public Access Catalog)** : 図書館の蔵書の情報はデータベース化されていますので、このシステムにより、書名、著者名、キーワード等を入力するだけで簡単に資料を探ることができます。また、インターネットに図書館のホームページを公開しています。このホームページからも資料の検索や利用案内を見ることができます。
- ◆ **相互利用** : 利用したい資料が図書館にない場合、他の大学の図書館を利用するための紹介状の発行や本学にない雑誌論文などの文献複写物の取り寄せ、他大学図書館からの図書の借用なども行なっています。さらに本学の学生および教職員は、帝京大学グループ校の一員として、帝京大学医学部、薬学部、理工学部の図書館を利用することも可能です。
- ◆ **研究・学習に最適な利用環境** : 閲覧室は各階にあります。本を読んだり、レポートを書いている学生たちを大きな窓から差し込むやわらかな日の光がすみ、落ち着いた独創の空間を作りだしています。2 階には個人閲覧室が 8 室、3 階には 8 人用のセミナー室が 2 室あり、個人でもグループでも利用できるよう、使い途に応じた環境を整えています。  
また、2 階には視聴覚室があり、ビデオを利用した学習もできるようになっています。館内には他にも、インターネットや CD-ROM 専用端末が備えられ、これらを駆使して様々な情報にアクセスすることができます。
- ◆ **PR 活動** : 図書館日より・新着図書リスト・新着雑誌特集記事リストを作成し、学内に配布して図書館の PR 活動に努めています。
- ◆ **地域社会に開放** : 大学の地域開放への一環として、図書館を一般の方にも開放しています。閲覧は自由にできずし、利用者登録をされた方には図書の貸出も行なっています。



## トピックス

### 部・サークル活動の拠点完成

会計課管財係 船木明男(e-mail: funaki@ntu.ac.jp)

中央高速道路と上野原の街を遠望できる多目的広場の一角に鉄骨造2階建、延べ床面積198m<sup>2</sup>の部室が完成しました。冷暖房完備で、部室数は12室です。吹奏楽部、写真部、天文部などの文化系クラブやバレー部、バスケット部、バドミントン部、卓球部、テニス部、スキー部などの体育系クラブのほか、自動車部、ワンダーフォーゲル部、チームライフル部などが利用する予定です。駐車場の整備や部室の完成など、本学が創設されてから10年、キャンパスライフの充実に向けた努力が続けられています。

### 情報コンセント・インターネット・キャンパスライフ

教務課 事務電算化担当 上條 一三(e-mail:kamijo@ntu.ac.jp)

本学では、近未来を想定して平成 11 年 9 月に整備した学内 LAN の利用が開始されました。学内 LAN は 1.5Mbps で外部の学術情報ネットワーク(SINET)に接続し、学内では 100Mbps の高速ネットワークになっています。この環境下で、学生のみなさんは、授業はもとより授業以外でも教室、学生会館、ロビーなど 100 ヶ所以上に設置された情報コンセントに携帯 PC 端末を接続し、大学の行事予定、文献検索など学内の情報だけでなく、就職情報、海外のホームページなどの学外情報を収集しています。電子メールを利用して教員へレポートを提出したり、友人との mail 交換等を行うなど Trendy なキャンパスライフがはじまっています。

編集後記: 本学は本年 3 月で創立 10 周年になります。本年 4 月から電子・情報科学科の名称がメディアサイエンス学科に変更されますので、この 10 年間に 4 学科中 3 学科の名称が変わることになりました。これは科学の進歩・発展と学ぼうとする学生のみなさんの思いに合わせて大学が教育内容を絶えず検討している結果であります。

本号では学長に本学創立 10 年の歩みと展望、各学科からは 2~3 人の先生方に教育と研究、あるいは、本学で学ぼうとする学生のみなさんへの期待について考えを述べていただきました。少しでも本学への理解を深めていただければと思います。

昨年 4 月に設置が許可された帝京科学大学大学院バイオテクノロジー研究センターがいよいよ完成し、本格的にスタートします。本センターが西東京・山梨県上野原地区および本学のバイオサイエンスの研究拠点として発展することが期待されます。

本学は規模の小さい大学ですが、平均して 1 年に 1 人の割合で教員が海外に留学しています。現在、環境マテリアル学科の落合鍾一先生がドイツのシュトゥットガルトにあるマックスプランク研究所に留学されています。香港についての一文を寄せていただいた松岡先生も留学された先生の 1 人です。勉学の途上で、先生方との接触を通して、学生のみなさんが眼を世界に開きかけを得て下されば幸いです。

TUST ニュースレター編集会議メンバー バイオサイエンス学科 助教 梶原 一人 (e-mail: kajiwara@ntu.ac.jp)